愛妹レッスン

――恥蜜のレオタード――

巨道空二
挿絵／翔丸

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

序　章　ポニーテールと汗とシャワー……4
第一章　恋愛相談はアニキの部屋で……11
第二章　妹の肌は誘惑の香り……28
第三章　おしおきはおねだりと引き替えに……78
第四章　羞恥の散歩はデートの中で……123
第五章　屋外エッチは我慢のあとで……182
第六章　レオタードは恥蜜に染みて……229
終　章　妹と彼女との境界線……279

登場人物 *Characters*

菅野 徹
(すがの とおる)

ひそかにＳＭ趣味のある大学生。血のつながらない妹・更紗の自分に対する思いに葛藤する。美術の道を目指していたが受験で挫折し、そのことで妹と距離ができてしまう。

菅野 更紗
(すがの さらさ)

徹に兄妹以上の感情を抱いている十八歳の女子高生。ポニーテールが映える快活な少女で、新体操部に所属。素直で甘えん坊な性格。バストサイズは手に収まる程度。

第二章　妹の肌は誘惑の香り

その日、徹の帰宅時間は遅かった。アルバイトの相棒が休んでしまい、彼の分まで働くことになったからだ。大事な用事があるということなら仕方がない。お互い様ということで人手が足りない分までひととおりの仕事をこなし、家に帰り着いた時には午後八時を回っていた。

両親はまだ仕事のようで、自動車も戻っていない。税理士や司法書士の両親は決算期にもなれば企業からの仕事が多く、事務所で夕食を取ることもよくある。今日も遅くなると携帯端末にメールがあったので、外食に出るつもりだった。

鍵を取り出し、鍵穴に差し込んで回した手が止まった。鍵がかかっていないのだ。家の明かりがついているのは確認している。あまりに不用心だった。

「更紗、いるのか？　鍵、あいてるぞ」

そう声をかけながら家に上がるが、返事はない。いつもならきちんと揃えられている小さな靴の踵がずれているのも気になった。明らかに異変が生じている。妹はいつもしっかりと戸締まりするし、靴だって揃えている。

「おい、更紗……」
家の中はカーテンこそ閉まっているものの、明かりのついているのはリビングと玄関くらいのようだ。不吉な予感を感じて足を早めながら家の奥に向かうと、妹はリビングにいた。彼女らしくもなくうずくまっている。思わず安堵のため息が漏れた。そのまま近づき、わざと明るい声で声をかける。
「なんだ、ここにいたのか。玄関の鍵くらいかけておけよ。不用心だぜ……」
最後まで言い切らないうちに、柔らかいものがぶつかってきた。温かく細い身体が押しつけられる。羽織っていただけのブラウスが滑り落ちていた。
白い腕も、薄い肩も露わになっているのにはっとした。妹の上半身は下着しか身につけていない。薬箱が出されているのに目を見開く。
「お、おい、更紗？　何かあったのか？　怪我してるのか？」
無言でしがみついてくる妹の肩は震えている。泣いているのだ。薬箱の蓋が開け放されたままで、どうしたらいいのかわからないまま、半裸の更紗の細い身体を抱きしめてやるしかなかった。骨格からして細く華奢で、あまり力を込めると壊れてしまいそうだ。ポニーテールが揺れているのが胸をせつなくさせる。
「ごめん、アニキ……すこし、こう、させてて……」

途切れ途切れにそれだけ言うと嗚咽が彼女の喉を満たした。兄にしがみつきながら泣きじゃくる。怪我そのものは腕の擦過傷くらいのようで、大したことはなさそうだった。事情のわからない徹としては背中を撫でてやるだけだった。無意識のうちに下着の紐を避けているのに、自分たちの関係が小さい頃とは違うのだと思い知らされる。更紗は女で、徹は男なのだった。

「話してみろよ、な？　まず、俺に話してみろ」

うん、うんと頷くものの、なかなか嗚咽はやまない。なんとか事情を聞き出した時には、今度は徹のほうがエキサイトしていた。

「更紗、生徒名簿を出せっ。向こうの家に怒鳴り込んでやる」

「ちょっ、ちょっと落ち着いてよ。アニキ。あたしだって悪いんだから……」

「男が女に手を上げたってだけで十分だ。しかも、そいつはっ」

先日更紗に告白してきたという同級生が性急に身体を求め、更紗が逃げ出した、ということのようだ。拒否された少年が激高して少女を押し倒そうとしたらしい。

「あたしがつきあうなんて言ったから……そんなこと言わなければ……」

「そんなことは関係ないだろう。手を出したのはそいつなんだっ」

普段明るくはきはきとした更紗らしくもない歯切れの悪さだった。そんな妹を突き

放すこともできず、兄としては怒りを露わにしつつも妹を抱きしめてやるだけだった。白い肌がむき出しの背中も二の腕も柔らかくて、無防備だ。見知らぬ男がたとえようもなく貴重なものを汚そうとしたことに腹の奥からたぎるような怒りがあった。

「怖かったの。彼の手が……」

細い指に力が込められ、兄の背に食い込んだ。小さな顔が胸に押しつけられ、柔らかな髪からシャンプーの香りが漂う。かすかな汗と、若い女性の肌の甘い香りが青年を困惑させた。

「おかしいよね。アニキの手は、ぜんぜんいやじゃないのに」

「当たり前だ。俺たち、小さい頃から一緒だろう？」

髪の毛に指を入れてくしゃくしゃにしてやると、涙を浮かべたままの更紗の顔に笑みが浮かんだ。長いまつげに涙の滴がたまり、眼が赤くなっているのに胸が締め付けられる思いだった。妹をこんなにした男を許せないと思う。

「頭、なでなでしてくれる？　もっとぎゅってしてくれる？」

「ああ、いくらでもしてやるさ」

更紗の細い身体を腕の中に抱きしめる。両腕の中にすっぽりと収まる身体。こんなに小さいのかと思う一方で、こんなにも育っていたのかと思ってしまう。しなやかで、

滑らかで、そして骨がないのではないかと思うほどに柔らかく温かい。これは子供の身体ではない。男に求められるだけの魅力を持った、若い女性の身体だった。

髪の毛を撫でてやると安心したようなため息が薄めの唇からこぼれる。閉じられたまぶたや眉の緊張もとけ、体重を預けてくるのをそっと支えてやる。

「お願い。もっとなでなでして。彼の手、忘れさせてほしいの」

「おまえがそう言うなら、いくらでもしてやるよ」

相手の家に怒鳴り込むのはいつでもできる。まずは更紗を落ち着かせ、事情をもっと聞き出すのが先だろう。怒りを抑えながら妹の身体の重みを支え、薄い背中でそっと手を往復させる。滑らかすぎる感触が掌から全身に広がっていくような気がした。

「アニキの手、優しいね」

「当たり前だ」

えへへ、と安心したように笑った妹が痛々しくて、もっと優しくしてやりたいと思う。ただ、気になるのは彼女が上着を着ていないということだ。上半身下着だけでは、どうにも落ち着かない。若い女性の滑らかすぎる肌は蠱惑に満ち、うっかりすると青年までもがその魅力にとらわれてしまいそうだ。

「ねえ、お兄ちゃん」

なんだ、と小さく答えると更紗がぎゅっとしがみついてきた。柔らかい少女の感触と体温がシャツごしに染み込んでくるようだ。胸板に当たる乳房が意外なほどのボリュームを感じさせ、ブラジャーのカップが歪むのがわかるほどだ。

「もっと、ぎゅっとして。抱きしめてほしいの」

甘える言葉に答えるように腕に力を込めてやると、妹が安心したように体重を預けてくる。ピンク色の唇からこぼれるため息に、青年自身がはっとした気分だった。

「男の子があんなに怖いなんて、思ったことなかったのにな」

「俺だって男だぞ。男は怖いものさ」

「お兄ちゃんは、怖くないよ。こうしてぎゅっとしてくれるもん」

すりすりと頬をすりつけてくる妹が愛おしい。更紗が意に添わぬ処女喪失をせずにすんでよかったと、心から思う。もう少し時間がたって、心から好きな男性ができた時になら、祝福だってしてやれるだろう。青年は子供というには育ちすぎてしまっている妹を抱きしめながら、そう自分に言い聞かせた。

「ねえ、もっと下のほうもなでなでして？」

「泣いたあとは甘えん坊か。まあいいさ」

見知らぬ少年への怒りはまだあるが、妹の今のほうが大事だ。背中を往復させてい

た掌を滑らせ、腰のあたりにまで動かしてやる。柔らかくて手触りのいい背中の肌の上を、優しく手を滑らせてやる。

「えへへ。お兄ちゃんの手、うれしいな。すごく久しぶり……」

無邪気なことを言う妹だったが、兄としては困ってしまう。手の動きの一つごとに少女の甘い香りが匂い立つようで、内心戸惑いすら感じる青年だったが、今更少女を引き離すわけにもいかなかった。

「もっと下も、なでなでして？」

甘えるように語尾を上げた言葉が耳をくすぐる。仕方なしに手を下げようとした徹の手がかすかに震えた。あるべき感触がなかったのだ。腰から下なら、当然のように学校指定のプリーツスカートがあるはずだったのに、それがない。いつの間にか、足下にわだかまっているのに気づく。更紗は完全に下着姿になっていた。

「お、おい。スカート……」

「いいから、なでなでして？　更紗のこと、慰めてくれるんだよね」

普段は明るくあっけらかんとしている妹の声がかすれていた。先ほどまでの泣きじゃくっていた時の声とも違う。その響きに、首筋がぞくりとした。

「お願い、お兄ちゃん……なでなでしてほしいの」

戸惑っている青年の耳に小さな音が弾けた。場所は更紗の背中。ブラジャーの留め具がはずされる音だった。一瞬のうちにブラジャーを腕から抜いてしまった更紗の姿が、広々として開放的なリビングの柔らかな照明の下に浮かび上がった。全館空調の効いた室内は寒くはないが、背筋が震える思いだ。

ほっそりとした身体。今身につけているのは、靴下とショーツだけだ。無駄がそぎ落とされたような細身の身体は、新体操の選手として鍛えられた成果だった。バイオリンのように見事にくびれた腰。ちょうど手に収まるほどの小ぶりながらもしっかりと形よく盛り上がる乳房では、先端のピンク色の乳首が陥没ぎみに埋もれているのがわかった。

白く細い首からなだらかな肩へのラインは細身ながらもしっかりとした筋肉を秘めた上腕へと続いていく。二の腕から手の甲へ、指先へと続くラインも優美でそこだけでも女性美はしっかりと主張されている。

身体の前面へと眼をやれば、なよやかな鎖骨の窪み、ボリュームこそ控えめながらもしっかりと上向いた形のよい乳房は呼吸とともにかすかに上下している。小さく淡く色づく乳輪の中心から反転した乳頭が窮屈そうに張りつめ、陥没から突起へと移行しようとしている様子に思わず唾を飲み込んでしまった。

鳩尾周辺も彫刻家が念入りに刻んだかのように流麗な凹凸を描き、滑らかなお腹から下腹部へと向かっていく。小さな布地に守られた処女の聖地は悩ましい盛り上がりを見せ、若い雌鹿のごとくに優美な太腿につながっていた。

「お兄ちゃんの手で、彼の手を忘れさせてほしいな」

まだ涙に濡れている瞳がきらきらと光っている。すがるような瞳に逆らいにくいものを感じる。昔から更紗には弱い徹だった。だが、血こそつながっていないといっても、近親相姦のタブーはやはりある。兄と妹の一線を越えてはいけないはずだった。

「彼の怖い手じゃなくて、お兄ちゃんの優しい手に触ってほしいんだ。だめ？」

細めの、ゆるやかな弧を描く眉の下で黒曜石のような瞳が濡れている。柔らかな髪が文字通りポニーテールのように揺れているのが可憐だった。

「俺の手だって、怖いぞ」

「お兄ちゃんの手なら、怖くないよ。だから、お願いっ」

返事をする間もなく、妹がさらに強く抱きついてくる。拒否できるわけもない兄の首にかじりつくように、必死さすら感じさせる激しさだった。つま先立ちになり、半ば前のめりになっての必死の抱擁にはもうお手上げだった。

「わかったよ。今だけだぞ。今だけだからな」

仕方なしに、下着姿の更紗を抱きしめる。シャツの布地ごしに妹の乳房が押しつけられているのがやけにはっきりとわかる。少女の、固さを残した敏感な膨らみが形を変えている。そのてっぺんでは、ピンク色の陥没乳首の感触すらもわかる。それだけで背筋がゾクゾクしてしまった。

「あっ……そ、そう。優しくしてほしいの」

片手を彼女の腰に回し、もう一方の手を下に伸ばしていく。兄との身長差を縮めようと背伸びをしたままの少女のお尻へ指を這わせる。柔らかいけれどプリッと張りつめた肌。女性らしい脂肪層の優しい感触と、しなやかな筋肉の重層的な感触が男の官能を刺激する。

妹の呼吸が浅いのがわかる。少女は緊張しているのだ。それをやわらげるべく、しっかりと抱きしめたまま、赤ん坊を撫でるようにそっと優しく、触れるか触れないかの絶妙な調整で指を這わせていく。

「ひゃうっ……あっ、あんっ」

男の手による本格的な愛撫など初めてなのだろう。うわずった、悲鳴にも似た喘ぎが薄めの唇から漏れる。少女の敏感な反応は面白いほどで、指先をすぼめ、広げ、さっと掃くように撫でるだけで滑らかすぎるほどに滑らかな肌が緊張し、わななくのが

可愛く、愛おしい。
「ひうっ……お兄ちゃんの手、彼の手と全然違う。すごく優しい……」
「そんな奴と比べるなよ。さっさと忘れろ」
おそらくは性急な、荒々しい愛撫だったのだろう。愛撫とすら呼べない、若い雄の愚行だったのかもしれない。まだまだ子供の更紗がどれだけ恐ろしい思いをしたのかと思うと、収まりかけていた怒りがまた燃え上がりそうだった。
「忘れさせて。お兄ちゃんの手なら怖くないから……ああんっ」
腰から尻、太腿へと指を走らせる。しなやかな筋肉を秘めた下半身はほっそりとしながらもしっかりとした感触で、張りつめたヒップの丸みが指を押し返してくる。そのくせすべすべとした肌が指先に吸いついてくるのを楽しみながら太腿の間に指を入れ、脚を開かせていく。
「や、やだ。恥ずかしいよ」
羞恥に力の入る下肢が緊張する。
「恥ずかしいだけか？　ほら」
「あんっ……だ、だめぇっ」
内腿をなぞってやると更紗の吐息が震えた。ふるふると内腿が震え、内股になって

脚を閉じようとするのを、さらに指を奥に割り入れていく。妹の抵抗はかすかだった。羞恥が邪魔しているだけで、嫌ではないようだ。
「お兄ちゃんの手が……あたしの身体に触れてる。すごく優しいの」
ひたすらに丁寧に、ゆっくりと手指を動かしていく。性急なのがだめなのはよく知っている。丁寧に、そして優しくが基本だ。女性の身体は優しく撫でさするだけでも感じてくれるし、それが一番確実だと思う。
「全然違うんだね。お兄ちゃんの手なら、こんなに感じるのに」
細い身体をくねらせながら、更紗がしがみついてくる。白い肌がうっすらとピンク色に染まっている。少女の身体が官能の波に洗われ、敏感な女の反応を示していく。
「今だけだからな。こんなことをするのは」
うん、と涙を浮かべながら微笑みを見せるのがいじらしい。せめて今だけでも思い切り感じさせてやりたいと思う。不幸な体験など、忘れてしまうのがいい。
「彼の手じゃ、感じなかったの。それで彼、怒っちゃったの」
自分勝手な欲望にかられた少年のことなど聞きたくもなかったが、更紗は喘ぎながら続ける。自分の中に溜まっているものを吐き出してしまいたいらしい。乳房を愛撫する指の一本が先端の突起をさぐり、少女の声をさらに震わせる。

「ん……。好きな人がほかにいるのに、つきあったりしたバチがあたったんだね」
手の中に収まる柔美な乳房に指を食い込ませると、妹が小さく喘いだ。乳首が勃起しているのに、立ち上がりきらない。陥没乳首を愛撫するのは初めてだが、思ったよりも頑固な感じだ。
「あたしの乳首……陥没しちゃってるの、変じゃない？」
「変じゃないさ。可愛いし、まだこれから成長するだろう」
そう応じながら、乳輪に埋もれた乳首を掘り出す。小ぶりな乳房の頂点でさらに小さめの突起が顔を出したのが可愛く思え、唇を押し当てて吸い出してやる。身を屈める窮屈さが気にならないほどに魅惑的な果実だった。
「はうっ……あ、あたしのおっぱいが……お兄ちゃんにっ」
デリケートな乳首は乳輪も柔らかく、皮膚が薄いように感じられる。繊細な感触を傷つけないように、舌と唇を巧みに使って乳首の輪郭をたどっていく。陥没から反転して勃起した乳首はいかにもデリケートで、表皮は薄く感じやすいようだ。乳輪のザラつきすらもが敏感で、すべやかな肌に緊張が走るのが愛おしい。小豆ほどしかなかった乳首がいつしか一回りも大きく突起し、熱を持って立ち上がっていた。
「ひゃんっ……。す、好きな人にされるのなら、こんなに感じるのにね」

妹の声がうわずっていた。兄の唇に乳首を吸い込まれた感覚に肩が震えている。
「お兄ちゃん、わかってる？　一応、あたしの告白なんだよ」
「更紗の告白なら、小さい頃に何度もされてるぞ」
ままごと遊びにつきあわされたことだっていくらでもあるし、お兄ちゃんのお嫁さんになる、というのは小さい頃の更紗の口癖だった。徹が大学の美術科の受験に失敗し、彼女が高校に入ってからは自然と距離が開いていたし、妹が今でも兄のことを好きだなどと言うのは想定外だった。
「ち、小さいころのとは、違うもん。あたし、本気だよ」
兄に半裸の身体をゆだねたままの熱っぽい言葉。アニキからお兄ちゃんへと呼び方が戻ったとたんに、妹は別人のように甘えてくるようになっていた。稚拙ではあるが、求愛の言葉には真実味がこもっている。
「本気っていったって、俺たち、きょうだいだぞ」
「わ、わかってるけど。気持ちはそんなに簡単に変われないもの……ひゃうんっ」
可愛らしく勃起した乳首を吸い上げ、乳房全体に軽くキスを繰り返すと、兄の頭を抱きしめようとしていた腕から力が抜けてしまった。
「あきらめようかとも思ったけど、やっぱり、お兄ちゃんが好き。だめ？」

まだ眼には涙がいっぱいだ。柔らかい髪が乱れていく筋か頬にかかっているのが色っぽい。どこか所在なげで、恥ずかしそうに頬を染めているのが新鮮だった。こんな状態で好きだと言われて、どれだけの男が抵抗できるのだろう。青年も逆らい難い誘惑を感じながら、かろうじて踏みとどまる。

「だめにきまっているだろう。当たり前だろ？　こうしているのだって今だけだぞ」

妹は無言で唇を重ねてくる。心地よい重みとともに肌と肌が触れあい、唇が密着する。身体をこわばらせるほどの背徳感と快感に満ちていた。

彼女が身につけているのは、下腹部を覆うショーツと靴下だけだ。むき出しの少女の肌はそれだけで心地よく、男の欲望をかきたてる蠱惑に満ちていた。

「ん……」

粘膜が溶けあい、すべやかな肌がこすれるだけで背筋がゾクゾクする。腕から、唇から、太腿から悦楽が染み込んでくる。シャツ一枚の距離はもはやないも同然で、直接妹の肌を感じているような気がしていた。

「今だけでもいいの。更紗の恋人になって。更紗をお嫁さんにしてほしいの」

「それは……」

更紗は兄の徹と血がつながっていないことを知らない。徹にだけは告知してあった

が、幼かった更紗には真実が告げられることもなく、今でもそれは秘密になっている。それなのに、彼女がここまで思い詰めていたのは驚きだった。

「彼の手の感触、お兄ちゃんに忘れさせてほしいの。最後まで、お願い」

黒目がちの大きな瞳を潤ませながらの言葉は、震えていた。兄に拒否されるのではないかという恐怖からか、身体もこわばっている。自分のことを更紗と呼ぶのも、子供っぽいと言われながらもなかなか直らない妹だった。

「あたし、なんでもするから。お兄ちゃんが喜んでくれるように、するから」

ほっそりとした手が動いた。ぎこちない動きで、唯一残ったショーツを下ろしていく。下腹部のデリケートな部分を覆っていた小さな布切れがずらされ、悩ましくも可憐な恥丘の盛り上がりが明らかになっていく。

「お、おい、更紗。まずいって……」

声がかすれていた。磁力を感じるほどに眼が吸いつけられるのを、必死にずらし、妖精のようなほっそりとした裸体を視界からはずす。かすかな音を立てて下着が落ちると、靴下を除いて生まれたままの姿の美少女がこちらを見つめていた。

「眼をそらしちゃだめ。更紗を見て、お兄ちゃん……」

流麗なラインを描く、たおやかな曲面の連続は彫刻家の手になるマスターピースの

ように照明の光にくっきりと明暗を浮かび上がらせている。小さめの顔がプロポーションをよくしているのがよくわかる。脳裏にスケッチブックが浮かび上がり、複雑な光線の中で揺らめく光と陰が若い女体をどう描くか、無意識のうちに計算していた。

新体操選手にふさわしい小ぶりな乳房はそれでも形よく上向き、無駄な肉のないお腹から腰への曲面がうねるのに唾を飲み込んでしまう。下腹部の茂みはよく手入れをされているだけでなく、草むら自体が薄めなのに目が引きつけられた。

「更紗だって、子供のままじゃない。もう結婚できる年齢なんだよ」

少女の瞳がきらきらと輝き、危険な色を浮かべている。ただ立っているだけでも美しいのは新体操のためにバレエ教室に通ったことがあるからだろうか。屋内照明の複雑な光線の中に、しなやかな姿態がまぶしくすら見えた。

人間の手が描き出せる階調は、眼で見て得られる階調の数分の一にすぎない。輪郭のデフォルメや精緻な描写だけでなく、色彩のアレンジによる記憶色の再現が写真と絵画の決定的な違いかもしれないと思う。頬の色がハイライトならば、艶やかな髪と瞳が一番の暗色だ。肌の色が複雑な光の中にきらめくようなグラデーションを作っている。産毛が光を反射し、肌を輝かせていた。

「感じているの、更紗だけじゃないよね。お兄ちゃんも感じてるんだよね……」

鼻の頭まで赤くした妹が兄の下半身に手を伸ばしてくる。魅惑的にすぎる裸体に見とれていた青年の反応が遅れる中、ぎこちない手つきでファスナーを下ろしていく。当然のように固く盛り上がる欲望の固まりが背徳感に大きく震えた。

「やっぱり。お兄ちゃんのが、すごく大きくなってるよ……」

ペニスはすでに硬度を高め、下着の中では苦しいほどに膨張していた。布地ごしに妹の指を感じるだけで後ろ暗い快感が生じる。トランクスの前のボタンがはずされ、熱く充血した肉棒が飛び出した瞬間、更紗の唇が小さな悲鳴を上げた。

「きゃあっ。こ、これってあたしの裸で、感じてくれたんだよね……」

目を丸くする少女の前で赤く充血し、反り返るペニスは若い獣のように凶暴で、ビクビクと震えている。それは少女の可憐な手指にあまりにそぐわない。

「お、おい、更紗っ」

立ち尽くす青年の前にひざまずいた少女が上目遣いに見上げてくる。後ろでまとめたポニーテールが可憐だった。おずおずと肉茎に手を添えようとして、ビクリと震えるのに手を離してしまう様子が可愛く、さらに血流が熱を持っていく。

「すごいな。お兄ちゃんのココ、その、ピクピクしてるよ」

びっくりしたような表情のまま、少女の頬は赤い。破廉恥な行為だということは自

覚しているのだ。それが禁じられた行為だということも理解して、それだけの覚悟を持って青年に求愛しているのだ。

「ここを、その……舐めると気持ちいいんだよね。やってみるから、教えてね」

ちゅっ。軽くキスをされるだけで電流が走ったかのように下半身が緊張した。柔らかすぎるほどに柔らかい唇が亀頭粘膜に触れる。朱唇が開き、少女の口腔に吸い込まれていく摩擦感に身震いしたくなる。

「くっ……優しく、そっと触るんだ。歯を立てないようにな」

妹の掌が、指が、竿やカリに触れるだけでゾクゾクしてしまう。だいたい、掌そのものが柔らかくすべすべしている。同じ生き物だということが信じられないほどに更紗の手が気持ちよく、妹の指の中でペニスが痙攣を繰り返す。

「うん……。お兄ちゃんので、お口がいっぱいになっちゃいそう」

小さな唇をいっぱいに開けながら肉棒をくわえる様子だけで背筋がゾクリとした。更紗は菅野家の宝物だ。彼女がどれほど大事に育てられたか徹はよく知っている。彼女は文字通りの掌中の珠だ。その更紗が、自分のペニスを頬張っている。

「ど、どうかな。気持ち、いい？」

たどたどしい手つきでペニスを握りしめ、細く白い指で愛撫する妹の姿が可憐だっ

た。両手でペニスを包み込むようにして、先端に接吻を繰り返しながらの上目遣いに征服感がこみ上げ、ペニスの硬度がさらに増していく。

細身のしなやかな身体を見下ろせば、小ぶりながら形のいい乳房の先端で、先ほどまで陥没していた乳首が立ち上がって一回りほども大きくなっていて、小さめの膨らみとの組み合わせがいやらしい。

「ああ。気持ちいいぞ。でも、いいのか？　止まらなくなっちゃうぞ」

「いいの。お兄ちゃんじゃなきゃやだ。だから、更紗の初めてになってね」

子供とばかり思っていた妹の言葉が欲望をくすぐる。血がつながっていないとは知らない更紗だ。よほどの思いと覚悟があるのだろう。この何年かアニキ呼ばわりされ、距離があったのが嘘のようだった。

「うわあ。握るだけでビクビクしてる。なんだかすごいな」

「根元のほうは、軽く握って上下するようにさするんだ。優しくな」

「う、うん」

たどたどしい手つきだったが、妹は忠実だった。丁寧に、両手を揃えるようにしてペニスに手を添える。普段は自信に満ちた眉を困ったように歪めて、そっと肉竿をしごいてくると、指の柔らかさがダイレクトに感じられる。

「根元は少しぐらい強く握っても大丈夫だ。逆に先端は敏感だから気をつけてな」
「う、うん……」
軽く握りしめられるだけで腰の奥に熱の塊が生まれる。妹の指に締め付けられ、こすりたてられるたびに脈動する快感が大きくなり、せつなさすら感じるほどだ。
「あ、先っぽから何か出てきたよ。トロリとしてる……」
更紗の白く細い指がからみつく肉竿は、優しくしごかれるごとにビクン、ビクンと震える。初めてでもあるまいに、自分でも驚くほどの興奮ぶりだ。その動きにつれ、先端の鈴口にねっとりとした液体が滴となって光っていた。
「更紗がエッチなことをするからだ。男が感じている証拠さ」
「そ、そうなんだ。えへっ。うれしいな」
無邪気な笑いにゾクリとする。まだ子供なんだと自分に言い聞かせるのに、もうブレーキが壊れたように抑制がきかない。妹が求めるままに進んでしまいそうだ。彼女の指が上下するたびに先端に生まれた粘液の粒が大きくなっていく。
「そ、それじゃあ舐めるね。これで……いい？」
ペロリと小さな舌が唇の間から顔を出した。どこが敏感なのかもわからないのだろう。いきなり先端の鈴口に舌を這わせ、にじみ出たカウパー氏腺液を舐めとるとその

まま周辺を舐めてくる。稚拙だが、更紗は真剣だった。舌のザラつきと唾液のぬめりが亀頭にからみつき、腰の奥から快美感が滲み出てくる。
「教えて。お兄ちゃんに気持ちよくなってほしいの。更紗、がんばるから」
「大丈夫。気持ちいいよ。少しずつでいいから、焦らなくていい」
「お兄ちゃん、気持ちいい？　うふっ。うれしいな。がんばっちゃうね」
微笑みながらペニスに頬ずりする更紗の口元が濡れ光るのにゾクリとした。艶やかで柔らかそうな唇が濡れているのがあまりに淫らだった。
童顔だと思っていたが、普段の彼女の表情が無邪気だからそう思っていただけらしい。妹の誘惑的な表情は想像以上に理性をとろかしていく。
「ん……ちゅっ、ちゅぷっ……こ、これれ……きもひ、いい？」
チロチロと舌で兄の逸物を愛撫しながら、陶然とした表情で見上げてくる。期待に満ちた視線が妙に面はゆい。
「ああ、上手だぞ、更紗。唇を大きく開けて、口に含みながらやってごらん」
「ん、うん……ひゃっ、ひゃううっ。お、お兄ちゃん、だめだよおっ」
優しく頭を撫でてやるだけでビクリと大きく震えた。少女の身体はひどく敏感らしい。薄い肩をすくめながら、口の動きも止まってしまった。それでも彼女の唇に触れ

ているだけで脈動するペニスが反応し、さらに固くなってしまった。
「あうっ、だ、だめだよぉ。お兄ちゃんにしてあげるんだもん……」
細い腕で、青年の腰にしがみつくようにしてペニスに唇を近づけてくる。ちょっとだけ恨みがましい目つきがまた魅力的で、ついつい意地悪してやりたくなる。
「あっ、ああっ……くふっ、んっ、んんちゅっ」
亀頭部を口に含んだところで、今度は首筋をくすぐってやると可愛く目をつむって、身体を固くして悦楽をやりすごそうとする。さらに髪の生え際をなぞるようにしてこすり上げてやると、細い身体をぷるぷると痙攣させる。
「んんっ……だ、だめだって言ってるのに、ひどいよぉ……んちゅっ、ちゅぷっ」
まだ涙で濡れている瞳で見上げながらもペニスを頬張り、口いっぱいに広がる男の肉塊を小さな舌先で愛撫しようとしている。
「ふふっ。口を休めちゃだめだぞ。カリの裏とかも、しっかり舐めろよ」
カリという言葉が理解できなかったのか、舌でペニスの周囲を探っていく。傘部にたどりついたところで頷いてやると、子犬のような素直さで熱心に舐め回し、愛撫を続けていく。稚拙ではあるが、更紗がしていると思うだけで興奮してしまう。
「んんふっ……お、お兄ちゃんの、すごく固くて、熱くなっちゃった……」

膨張率を増したペニスは先ほどまでと比べて一回り体積を増やし、さらに急角度で反り返っていた。あまりの変貌ぶりに更紗が戸惑った声を上げるほどだ。

「そう、カリの裏とかが敏感なんだ。いいぞ。竿のほうもしごくようにしてな」

兄に誉められたのがよほど嬉しいのか、妹は熱心だった。柔らかい唇が感じやすい亀頭部をしっかりと締め付けながら舌が全体を舐め回し、カリ裏をなぞり上げる。

ザラつく舌が敏感な亀頭粘膜を加熱させ、さらに敏感にしていく。指で根元からカリ近くまでを締め付けながら小刻みにしごいてくるのがじわじわと快感を押し上げ、気づけば射精感が高まってペニスがうごめくほどだった。

「ん、ちゅぷっ、んんっ……こんなに大きいと、困っちゃう……」

ポニーテールの髪がリズミカルに揺れている。時々もの問いたげに見上げてくる黒い瞳が男の欲望をさらに刺激し、先端からトロトロの粘液を滲ませてしまう。押し寄せる快感はぎこちない愛撫とは裏腹に濃厚で、背徳感のスパイスがきいている。

「よし、うまいぞ。そうやって、ちょっと吸い込むようにしてみろ」

少し誉められただけでも嬉しそうに身体をくねらせるのがまるで子犬のようだ。白い肌がうねり、指示された通りに唇をすぼめて吸い上げる。ぎこちない手つきのまま、おそるおそる肉竿をしごかれる感覚も兄としてはたまらないものがある。背徳感と征

服感が肉棒を満たし、欲望を増幅していく。
「ん、んふっ……ちゅっ、ちゅぱっ、ちゅぷちゅぷっ――っ」
更紗がバキュームをきかせると、吸い込まれたペニスと唇がちょうどピストン運動のような摩擦を生んだ。張りつめた亀頭粘膜と傘の周縁部分に熱感が生じ、腰をくねらせたくなるほどに気持ちいい。今まで子供だとばかり思っていた妹に男への奉仕を仕込んでいる背徳感と征服感が青年を高揚させていた。
「くっ……いいぞ。更紗」
若い雄は自分でも気づかないうちに激しく興奮していたらしい。腰の奥が脈動するほどの快感に、射精感がさらに高まっていく。今出すわけにはいかない。そろそろ潮時だろう。そっと髪を撫でてやると少女は期待通りに声を上げ、身体を震わせた。
「ふふっ。よくできたな。いい子だ」
「はうっ。そ、そんなに撫でられたら、変になっちゃうよぉっ、あふっ」
幾度頭を撫でてやっても敏感な反応を見せるのが可愛い。不意打ちで桜貝のような耳たぶをくすぐると両手を胸の前で縮めるほどの感じやすさを見せる。
「今度は俺が更紗を気持ちよくしてやる番だな」
「そんなこと言われたら恥ずかしいよう」

妹が唾液で濡れた口元を拭った瞬間の濡れ濡れと輝く唇に背筋がゾクリとした。潤んだ瞳にかすかに赤く染まった頬が普段の妖精のような雰囲気から、生々しい肉体を持った女性へと彼女を変貌させていた。

細い身体を抱きすくめるようにしてソファに倒れ込む。抵抗はない。さすがに恥ずかしいのか、目をつむって身体を固くしている。柔らかい髪が肩から胸に流れているのを指で梳(すず)くようにして直してやるだけでも感じるらしく、唇からせつなげな吐息が漏れた。

「今、父さんや母さんが帰ってきたらどうするつもりだ？」

「お、お父さんもお母さんも、今日は遅いんでしょ？　そ、外で食べろって……」

几帳面な母親が更紗にも連絡を入れていたらしい。逃げ道が絶たれたことを感じながら妹の首筋に顔を埋めると、ミルクのような甘い香りが心地よかった。

「あっ……あんっ、く、首筋がジンジンしてる……」

軽くキスをしてやるだけで、柔らかく敏感な肌が震える。更紗の喘ぎには微妙なビブラートがかかっていた。

「それは疼(うず)くって言うんだ。感じてるんだな、更紗は。もっと感じさせてやる」

「そ、そんなこと言われたら恥ずかしいよ。んっ、んあっ、ああんっ」

少女の身体に生じたざわめくような快感はみるみるうちに激しい疼きへと変わっていく。滑らかすぎるほどに滑らかな柔肌はどこも敏感で、青年が驚くほどに豊かな反応が返ってくる。それこそ指一本で女体が反り返り、喘ぎ声がこぼれるほどだ。

「くふっ、な、なんだか変なのっ。びくびくしちゃうっ」

彼女の反応の一つ一つにポニーテールが揺れる。柔らかな髪質のため本当に子馬のしっぽのようで、それが揺れている様子には可愛さがある。

「感じてるからさ。気持ちいいんだろ？」

無意識のうちに防御態勢を作っているのか、自分の胸を抱くようにして小さくなろうとする少女の手をとり、首筋から肩へと唇を這わせていく。

「わ、わかんない。なんだかしびれちゃって……ひゃんっ」

腕がどいたところには、形よく膨らんだ乳房が息づいている。陥没ぎみだったはずの先端はまだ突起したままで、彼女の息づかいに、身じろぎ一つに揺れる柔らかくも温かい感触を掌で受け止める。

「きれいな胸だ」

「小さくない？　あたし、おっぱい大きくないから」

自分の身体を過剰に意識してしまうのは、年頃ならではだろう。確かに大きいとは

いえないが、新体操選手はバストが大きすぎるのは向かないし、この年頃の少女としては平均的な大きさではないだろうか。
「小さくなんかないぞ。それに、大きさよりは、感じやすさのほうが大事さ」
まだ成長期にある乳房の固さを感じさせる膨らみを指を開いて優しく包み込む。指先に吸いついてくるような肌理の細かさと、指を食い込ませれば中から押し返してくるような密度と弾力を感じる。
「うっ、うんんっ、感じやすさって。お兄ちゃん、すごくエッチな感じ」
細い身体をくねらせるけれど、男の手から逃れることなどできはしない。青年の手が丸みに食い込むだけでもせつなげな吐息がこぼれてしまう。
「エッチじゃだめなのか？　エッチなことしてるんだろう？」
そう返しながら男の中指と人差し指がまろやかな丘陵地帯の頂点の突起を挟んでしごくように動かす。ただでさえ普段は陥没していて過保護な乳首がこすられ、ヒリつくような熱さを女体の奥に伝えていく。
「お兄ちゃんの手が触るとおかしくなっちゃうの。はうっ、んんっ」
「それが気持ちいいってことさ」
兄の指の間で桜色の乳首が色づきを増し、かすかに大きさと固さを増した。乳輪も

固く厚くなり、少女の身体が女性としてしっかりと成長していることを感じさせる。
「やっ、やあっ。なんだかヒリヒリするの。熱くなっちゃうっ」
少女の両足がもどかしげにすりあわされる。内腿がぴっとりと閉じられ、膝小僧の丸みが小さく円を描いていた。
「気持ちいいんだろう？　更紗。気持ちいいって、言ってみな」
「やっ、やだっ。恥ずかしいよ。あっ、あんっ。つまんじゃだめっ」
熱を持った乳首をコリコリと指の間で転がしてやると妹の澄んだ声が震える。兄の手をどかしたいのに、力が入らないのか兄の腕に掴まる形になってしまっていた。まるで男の手をねだっているようにすら見える。
普段乳房に埋もれている陥没乳首が勃起しているのがよほど恥ずかしいのか、更紗は目をつむったままだ。それでも身体が反応するたびにポニーテールが揺れる。言葉がなくとも彼女の反応ははっきりとわかるほどだった。
「あんっ、あっ、はあっ、はあっ……はうっ、い、いきなりぃっ、んっ、んんっ」
片手で乳房をもみしだき、乳首を刺激しながらもう一方の手を彼女の下半身に伸ばしていた。大理石の円柱のように滑らかで白い太腿を掌でなぞるとびくん、と少女の身体が大きく震えた。

「気持ちいいって、言えよ。更紗」
「き、気持ちいいだなんてっ。は、恥ずかしいよっ」
潤んだ瞳とすねたような口元がミスマッチだった。頬が赤く染まり、うっすらと汗ばんでいるのがわかる。少女の甘い体臭がさらにかぐわしく匂い立つ。
「恥ずかしくなんかないさ。俺は更紗を気持ちよくしたいんだからな」
閉じ合わせようとする太腿の間に手を差し込み、開かせる。抵抗はあったものの艶やかな肌を撫で回すだけで力が入らなくなってしまうようだ。下腹部から恥丘の盛り上がりに進めば、小さな三角帽子が繊毛の中に隠れているのがはっきりとわかる。
「更紗のここはどうなっているのかな」
「く、口に出さないでよ。お兄ちゃんの意地悪っ」
うっすらと刷毛で掃いたように薄い恥毛がやわやわと揺れている。羞恥にこわばる太腿と下腹部の間で、少女の秘めやかな部分が息づいていた。うっすらと色素の沈着はあるものの、肉色の花と呼ぶのがふさわしい綺麗な女性器だ。左右の花弁の乱れもあまりなく、発達の度合いも控えめで美しいとすら言える。
「大丈夫。綺麗だよ。更紗のあそこ、かわいいぞ」
いやいやをするように頭を振る少女だったが、太腿の間には男の脚が侵入していて

内腿で男の脚を締め付けるばかりだった。
「だ、だから恥ずかしいってばっ」
ぴっちりと閉じた清楚な印象の秘処はそこだけが別の生き物のようだ。少女の身体の白い肌とはまるで違う、サーモンピンクから鮮紅色へのグラデーションが美しい。その花弁のあわせ目に一筋光るものがある。とろみを帯びた液体が花弁の間にたまり、ぷっくりと押し出されるようにして水滴となった。みるみるうちに大きくなっていくのに目を見張る。
「おや、更紗。濡れてるんじゃないのか」
「だ、だから口に出さないでって……あ、あんなにされたら、その……ひんっ」
そっと秘裂をなぞり、水滴を指ですくい上げるようにすると少女の全身に緊張が走った。足の指までがピンとするほどだった。
「やっぱり、濡れてるな。感じてたんだ、更紗。嬉しいぜ」
「うううっ。お兄ちゃん意地悪すぎるよ。あまりいじめないでよぉっ」
ソファに顔をうずめるようにして身体を震わせる。片手はしっかりと握りしめられ、もう片方の手はそんな顔を隠すようなしぐさを見せていた。
「更紗が素直じゃないからな。意地悪にもなるさ」

「あ、あたしはいつだって素直だよっ。あんっ、ひ、開かないでっ」
中指と人差し指で花弁を開くと、じっとりと濡れた花弁の内側が明らかになる。そこはまるでルビーのように赤く輝き、ヌラヌラと濡れている。秘裂の内側がみるみるうちに蜜で満たされていくのはめざましい眺めだった。
「だって、気持ちよくないんだろ。こんなことされてもさ」
肉裂に指を埋め、花弁のあわせ目から蜜をかきだすようにしながらなぞると柔らかな花弁が追従し、粘度の低い蜜に濡れた粘膜が指に吸いついてくる。プルプルと太腿が震え、柔らかい太腿が男の手を強く挟み込んだ。
「ひあっ、あっ、ああっ……そ、それはぁっ、あっ、あんんっ」
「ん、どうした？　気持ちよくないなら、もっとしてやらなくちゃな」
「そ、そうじゃなくてっ、はっ、恥ずかしいからぁっ。だ、だめぇっ」
男の指が肉のあわせ目をくつろげると、内部にたまった蜜がかすかに泡立ち、ぬめ光る粘膜がうごめく。羞恥のあまり脚を閉じようとするが男の力にかなうわけもなく、秘肉の蹂躙を許してしまう。
「あうっ、んっ、んんふっ……そ、そんなにされたらぁっ」
「大丈夫。気持ちよくなるまでやってやる。心配するなよ」

腕を挟み込もうとする太腿の感触が絶妙だ。ほっそりした身体は新体操で鍛えているだけあって筋肉も十分に発達しており、密度感がある。細身ながらもプリプリと弾力に満ちた手触りだ。何より、すべやかな肌が押しつけられ、こすりつけられる感覚がたまらない。

先ほど妹の口と手で愛撫された股間の肉茎が大きく反り返っていた。垂直を超え、鋭角な立ち上がりを見せ、血管が浮き上がる凶暴な姿だ。

「男としては、気持ちよくなってもらわないと気がすまないからな」

（きもち、いいからっ）

せつなげな吐息とともに妹の唇が小さく動いたのを、兄の目は見逃さない。言葉にはほとんど出ていなかったが、唇の動きだけでもだいたい意味は通じた。

「どうした？　何か言ったか？」

「き、きもちいいから。お兄ちゃんの手、気持ちいいからっ」

今度は声になっていたが、羞恥に押しつぶされそうな小さい声だった。恥辱にまみれた声は震え、耳まで真っ赤になっている。

「ん？　声が小さくて聞き取れなかったぞ。もう一度頼む」

もちろん聞こえているのだが、徹としては少し意地悪してやるつもりだ。指を肉溝

に滑らせながら、下腹部側の小さな肉のフードに指をかける。その下の敏感すぎる肉粒を捕らえられた女体が硬直した。
「ひっ……」
包皮ごしに女の快楽神経の集中する突起を刺激すると太腿がこわばり、内股になったままの膝小僧がガクガクと震えた。
「お兄ちゃんの手、気持ちいいからっ。いじめないでっ」
澄んだ声には焦りがある。それ以上愛撫を続けられたらおかしくなってしまうといった必死さだった。
「ふふっ、いじめたりなんかしないさ。可愛がってやるよ、更紗」
「あうっ」
まだ突起したままの乳首が乳房の中に埋もれてしまわないように、軽くキスして吸い上げてやると、妹の細腰が浮き上がりそうになる。どこもかしこも敏感になっていて、どこを触れても反応してくれる。先ほどまで埋没していた乳首はピンク色の薄皮をピンと張りつめさせ、呼吸とともに上下していた。少女の形よい乳房にふさわしい、可憐な蕾だ。
「もっと気持ちよくしてやるからな」

そう言いながら、肉粒をくるむ薄皮を指でずらし、そっと剥き上げていく。すでにたっぷりと分泌された乙女の体液で濡らした指で蜜をまぶしながらの感覚に少女が薄い肩を震わせた。
「ひっ……。そ、そこは、そのっ」
「大丈夫。優しくしてやるよ」
少女の焦った声が可愛い。震える声音が耳に心地よく、ついついいじめてやりたくなってしまう。少女が羞恥と恐れに身体をこわばらせるのを目と耳、そして触覚で楽しみながら指をさらに動かしていく。
「更紗のクリちゃんが顔を出すぞ」
「やっ、やだあっ。そんなこと、言っちゃだめぇっ。ひっ、ひぃっ」
赤いルビーのような輝きを持つ小さな突起が肉裂の狭間に顔を出した。想像以上に美しい眺めに、胸を突かれる思いだった。色素の沈着もまだ薄い少女の秘処は可憐と言ってもいい眺めで、そこに浮かび上がる肉色の突起は、真珠と形容されるのも納得できるほどの綺麗さだ。
「恥ずかしいよぉ。あまり意地悪、しないでぇ」
完全に剥き上げてしまうと鮮紅色の肉粒がまぶされた蜜にヌラヌラと輝き、美しく

も淫らな眺めだ。青年の股間の逸物が疼き、痛いほどだった。妹の情けない声には甘えが確かに混じっていて、それがまた雄の本能を疼かせる。
「お兄ちゃんに見られてる。全部、見られちゃってる……あうっ」
ほとんど外気に晒されたことのない美少女の秘処が徹の眼前に露わになっている。激しい羞恥に内腿の筋がピクピクと震えるが、すでに力が入らないらしく、閉じ合わせようとする太腿の力は弱かった。
「全部じゃないぜ。全部ってのは、こういうのを言うんだ」
「ひゃうっ。だ、だめぇっ。広げないでっ」
肉の花弁をくつろげ、人差し指と中指を巧みに使って広げてしまうと肉の花の内側のサーモンピンクの肉層が露わになる。処女肉が震えうごめいているのがはっきりとわかった。青年の喉がかすかな音を立てた。急速に膨れ上がっていく欲望をこらえきれなくなっていた。
「そ、そんなとこ見ないでよ。恥ずかしいよ、お兄ちゃんっ」
羞恥に反応しているのか肉層の重なりはしっとりと濡れ、収縮とともに濃密な女の香りが匂い立つ。雄の欲望をたぎらせる眺めだった。
「更紗の一番可愛いところだろう。見ないでどうする」

「そんなあ。更紗、おかしくなっちゃうよぉ……」
顔を手で隠したまま、妹が泣きべそでもかいていそうな声を上げる。そんな激しい羞恥の中でも拒否はない。白い肌にうっすらと汗を浮かべながら、はしたなくも可愛い声を上げるのをやめられないのが、ひどく可愛いと思う。
「ここ、舐めるぞ」
「え、舐めるって……ひゃうっ、んっひぃいっ、ひああっあっ、ああっ」
男の唇が触れた瞬間の緊張は、すぐに激しい痙攣と悲鳴にも似た喘ぎに変わった。いや、すでに嬌声と言うべきだろう。少女の唇からは恥ずかしいほどの声がこぼれ、青年の耳を楽しませるのだった。
「だめっ、だめだよぉっ、あうっ、んっ、んんっ」
反応は激しい。肉の花弁のあわいに舌を差し込むだけで全身に緊張が走り、肉層がうごめく。あふれる花蜜をかきだし、すすってやれば恥辱にまみれた吐息に甘くもせつない声が混じる。かすかな塩味と、それ以上に甘美な香りが鼻腔をくすぐる。すっかり発情した若い雌の香りだ。肉悦に火照る花弁を唇に感じながら甘露のごとき蜜液をすすると妹の吐息が狂おしいほどに乱れた。
「お、おかしくっ、おかひくなっひゃうひゃらっ」

「おかしくなっちゃっていい。素直に感じていればいいさ」
妹の秘処に顔をうずめながら、彼女の全身を感じる。こすりつけてくる太腿が心地よい。片手で触れるのは形よく弾力のある乳房。一方の手で彼女の秘部周辺を愛撫しながら陥没乳首が埋もれてしまわないようにつまみあげてやる。
「お、お兄ちゃんの顔、汚れちゃうよっ。こんなのだめだよぉっ、ひあっ」
「だめじゃない。更紗のは汚くないからな。そら、奥、いくぞ」
秘裂に隠されたさらに奥へと通じる膣道を探り当て、チョンチョンとつつく。膣口は入り口のすぐ奥できゅっと締め付け、閉じられている。そこに舌を差し込んでいくとたっぷりとした蜜が口元を濡らした。内部には愛液がたまっていたらしい。
「ひゃっ、ひゃおっ、だ、だめぇっ。身体の奥が変になっちゃうっ」
妹の身体のうねりが激しくなっている。快楽曲線が急カーブを描いて極大値に向かっているのだ。膣口を舌でねぶりながら、片手で肉豆を探り当て、たっぷりと蜜をまぶした指で撫で回す。
「あっ、くうっ、んっ、だ、だめぇっ。とんじゃうっ、身体がとんじゃうっ」
浮遊感に包まれているのだろう。言葉にも脈絡がなくなっていた。畳みかけるようにして舌を奥にまで差し入れながらのピストン運動とクリトリス責めがとどめになっ

た。感じやすい少女は汗ばんだ白い肌をほの赤く染め、激しく喘ぎながら絶頂へと駆け上っていく。

「あうっ、お兄ちゃんっ、更紗とんじゃうっ。あっ、あああっ――っ」

人差し指で蜜にぬめる肉突起の上を往復させるように撫で回す。それだけで敏感すぎる快楽器官は少女の全身をこわばらせ、身体の芯の熱を一気にひきあげていた。膣肉がきゅっと締まり、舌を追い出そうとするのを押し返しながらクリトリスを指で挟んでつまみあげ、しごいてやる。

「ひあっ、あっ、あああ――っ……」

ひとしきり全身を震わせたのち、くたりと力が抜けてしまう。あとは兄の腕の中で荒い呼吸に身を任せる少女がいるばかりだった。顔を隠していた手からも力が抜け、ソファのクッションにもたれかかっている。

「あ、あは。これ、イッちゃったのかな……なんか、すごい……」

陶然とした声。潤んだ瞳がかすかに開いたまぶたから覗けているのがひどく色っぽく、赤らんだ頬とあいまって淫らですらある。

「たぶん、そうだろう。可愛かったぞ、更紗」

可愛かったと言われた瞬間、ようやくどいたと思った手が顔を完全に覆ってしまっ

たが、そろそろと白い手が動いて黒目がちの大きめの目が露わになった。潤んだまま、かすかにぼおっとしているのがわかる。
「で、でもさ。お兄ちゃんは、イッてないんだよね。お兄ちゃんにも……」
手が伸ばされ、青年の頬に触れた。その滑らかな感触にゾクリとした。かろうじて抑制がきいていた下半身が疼き、最後の一線を越えてしまいたくなる。ただでさえ更紗は今は靴下を除けばまったくの素裸という扇情的な姿なのだ。
「お兄ちゃんも気持ちよくなって。あたしの初めてをもらってほしいの」
「いや、更紗、それは……」
恥ずかしそうに身体をよじりながらのおねだり。上目遣いが男の征服欲を刺激する。どこで習ったのか、それとも女という生き物の本能なのだろうか。妹の精一杯の媚態に理性が大きく揺らいだのを感じる。
「お願い。お兄ちゃん。あたしの初めてになって。ね？」
「くそっ。後悔するなよっ」
少女の手が兄の手をとって引き寄せた瞬間、青年を縛っていた理性の最後の糸が切れた。妹の細い身体の上にのしかかっていく。
「あっ……お兄ちゃんっ。大丈夫だよ。更紗の夢だもの。後悔なんかしないよ」

しなやかな手が青年を首に触れ、抱き寄せようとするその感触すらもが心地よく、彼女の秘部を探る手が一瞬止まるほどだった。

「いくぞ、更紗っ」

少女が小さく頷くのに答えるように、いきりたつ欲棒を肉裂の中心にあてがい、腰を前に突き出しながら体重をかけていく。肉の槍が処女肉を貫くその瞬間だった。柔媚な肉ひだにあてがわれた剛直が突き出され、肉の狭間に埋め込まれていく。

「あっ……だ、大丈夫。来て。そのまま、来てほしいの」

ねっとりとした、濡れた肉層がペニスにまとわりつく。緊密な締め付けはむしろ侵入者を拒絶しようとしているようで、呼吸するかのように収縮を繰り返す膣肉がかすかにゆるむ一瞬を狙いながら肉の杭を打ち込んでいく。

「あまり痛いなら、言えよ。もうちょっとほぐすから」

「ほ、ほぐすって……お兄ちゃんのエッチ……んんっ」

狭道を無理矢理押し広げられる苦痛に喘ぎながらも、更紗は徹を拒もうとはしない。太腿をプルプルと震わせながらも、兄にしがみつこうとする。花弁を押し広げた怒張が入り口部分の狭隘な部分を貫いた瞬間、かすかな音がした気がした。

妹の処女膜を引き裂いた感覚を、青年は確かに感じた。たっぷりと潤っている柔媚

な膣道は狭くも柔軟で、奥の広がった部分のあたりにも温かな肉ひだがうごめくのを感じる。初めて男を受け入れる処女地はきつめながらもかなりの柔軟性を見せ、じわじわとその奥を解放していく。

「はあっ、はあっ、はあっ……か、身体の奥まで、バラバラになっちゃいそうっ」

丁寧な愛撫に潤っているとはいえ処女の肉壷はきつい。ぬめりを帯びた肉壁が幾重にもペニスを締め付け侵入者を拒むのを、少しずつ押し広げていくしかない。新鉢を割る苦痛をこらえる妹の表情が徹の胸を締め付ける。

「大丈夫か、更紗。もう少しだ……あと少し……」

声をかけてやれば小さく頷きながら、ぎゅっとしがみついてくる。細い指が食い込んでくるのが愛おしい。しなやかな腕が首に巻き付き、震えているのを安心させるように軽く撫でてやる。今までになく近づいたお互いの顔が目の前にあった。

「入ったぞ、更紗の中に、奥まで……」

よほど痛いのか、少女は涙目になっていた。それでも口に出したりしないのがいじらしい。そっと頭を撫でてやると、ほっとしたような笑みを浮かべた。

「ほ、本当に？　お兄ちゃんがあたしの中にいるんだね。嬉しいな……」

子宮口に達したペニスがびくんと反応して反り返ろうとすると、戸惑ったような瞳

で見上げてくる。乱れたポニーテールを直してやりながら彼女の耳に唇を近づけていく。それだけで妹が肩をすくめるのが可愛いと思う。
「痛いの、少しはおさまってきたか？」
「う、うん。もう大丈夫だと思う。お兄ちゃんのしたいようにして？」
囁くような小さな声。普段は元気一杯な更紗らしくもないが、これはこれで可愛げがある。何より、痛みがあるだろうに微笑みさえ浮かべているのがいじらしい。
「それじゃあ動くけど、痛かったら言えよ」
耳たぶに軽くキスするだけで敏感な肌が反応し、膣肉が締まる。吐息が震えるのすらも愛おしく、この美肉を自分のものにしたい欲望にかられた。ソファのクッションに両手をつくようにして腰を使っていく。
「あ……や、やあっ」
カリが柔肉をえぐる。腰を引いて膣口付近の締め付けを楽しんだかと思うと、今度は奥へと突き入れる。中程の広がりと肉ひだのやんわりとしたまとわりつきが心地よく、その先はまた締まり気味になり、狭まっていく。
「や、やだっ。声、とまらないっ」
内部の潤いも増してきたのか、だんだん滑りがよくなってくる。動きが軽くなって

くるにつれ、妹の声も弾むようにリビングに響いていた。それが恥ずかしいのか、口元に手をもっていくのだがとても抑えきれないようだ。
「いいんだよ。可愛い声、聞かせろよ」
一突きごとに彼女の内部の形がペニスに伝わってくる。先端にコツンと触れる塊の感覚はおそらく子宮だ。彼女の女の中心がそこにあると思うとそれだけで興奮が増す。ペニスがさらに硬度を増し、肉の鞘を破らんとばかりに反り返る。
「そ、そんなの恥ずかしいよっ。あんっ、んっ、んんっ」
すべやかな太腿が男の腰を挟み込む。男を逃がさないかのようなしぐさだが、本人は意識していないようだ。男の腰の動きにつれて細腰がうねり、抑えきれない喘ぎ声がこぼれ出す。ぎこちない動きがみるみるうちに滑らかになっていくのは新体操選手ならではの身体の柔らかさと運動能力かもしれない。
「いいさ。更紗が口に出さなくても、ここが教えてくれるからな」
更紗がたとえ声を抑えたところで身体は正直だ。たっぷりと潤った秘処と剛直のぶつかりあいは耳にも明らかな水音になって響き始めていた。
「ほら、聞こえるだろう？　俺たちがつながっている音さ」
「や、やだっ。こんなのだめぇっ……あんっ、んっ、んあああっ」

肉が肉をうがち、肌が肌を打つ音が恥ずかしくも淫らに響きわたる。ペニスが蜜液をかきまわす発泡音が、粘っこい液にこもるかすかな破裂音が、耳を塞いでしまいたい風情の可憐な少女の秘肉から発されている。

「恥ずかしくなんかないさ。感じている証拠なんだからな」

すっかりほぐれてきた更紗の内部は実によい反応を示していた。肉棒を抜き挿しするピストン運動の一つ一つに反応して締め付けてくれる。入り口、奥、中程のそれぞれが違う強さで重層的に締め付けながら亀頭粘膜を、肉竿を、カリをこすり上げてくる。おまけに、彼女の内部の肉ひだには突起があるようで、プクプクとした粒状の感触がカリを刺激してくるのだ。

「おれだって感じてる。おあいこさ」

数の子天井。表現すればそれに近いだろう。聞いたことはあるが体験するのはむろん初めてだ。更紗の内部は数の子というほどには細かくないから、名付けるならばイクラ天井とでもなるだろうか。名器と呼んでいいかもしれない。

「えっ……あっ、ああっ、お兄ちゃんのが熱いのっ」

腕の中で妹が喘ぎ、悶えている。目に入れても痛くないほどに可愛がられ、愛されてきた少女を、今、自分が犯している。近親相姦の禁忌を破る背徳感が全身を痺れさ

せ、奇妙な快感を呼び起こしていた。
「お、お兄ちゃんも気持ちいいよね。あたしだけじゃないよねっ、んんっ」
それは目もくらむような興奮だった。小さい頃からなついてくれ、何かと後ろをついてきた小さな少女。大学受験に失敗するまでは誰もがうらやむほどに仲がよい兄妹だった。その妹を、今、自分の肉棒が貫いている。
「ああっ、更紗の中、いいぞっ」
熱したシリンダーの中をピストンが往復する。灼熱したピストンは一突きごとに筒の内側との摩擦で高熱にあぶられ、潤滑油が煙を上げるほどだ。少女の甘い香りに包まれながら、あっという間に絶頂に駆け上っていきたくなる。
「ひゃうっ、こ、こんなにされたらおかしくなっちゃうよぉっ、あううっ」
苦痛混じりで、涙を目に溜めていたのが嘘のように妹の表情がとろけている。まだわずかに残る苦痛と、恥ずかしさと快楽が更紗の頬をうっすらと赤く染めていた。
「おかしくなってしまえばいいっ。気持ちよくなっちゃえよっ」
青年とてそれほど女性経験が豊富というわけではない。久しぶりのセックスで頭に血が上ってしまっているようで、どうにも抑制がきかない。がむしゃらに腰を振り、熱い泥濘に杭を打ち込んでしまう。鈴口からはとめどもなくカウパー氏腺液が滲み、

更紗の愛液と混じりあっているのがわかった。
「ああっ、あっ、あっあああっ……ま、また飛んじゃいそうなのっ」
「イッちゃえよっ。気持ちよくなってしまえっ」
固く目をつむった少女がいやいやをした。男に組みしかれ、貫かれながらも美しさを失わない整った肢体がかすかに震えている。もうあふれ出る悦楽を抑えきれなくなっているらしい。
「やだあっ。お兄ちゃんと一緒がいいっ。一人だけはいやなのっ」
ヒクヒクと膣内粘膜が痙攣を始めている。絶頂が近いのがわかる。それでも兄と一緒がいいとこらえようとしているのが若者の胸を捕らえた。
「そうか。それなら一緒にいくぞ。おらっ、おらぁっ」
膣内粘膜は大量の淫蜜にコーティングされ、抽送は軽やかに、そして速くなっている。速いリズムに刻まれた吐息が、喘ぎがさらに熱を帯び、せつなくなっていく。
「あっ、はうっ、いっしょに、一緒に来てぇっ、あっああっ――っ」
急上昇する快楽曲線の頂点に達したのは、わずかに少女が早かった。
「おおっ、いくぞっ。更紗の中に、出してやるっ――」
脈動する熱い液体がマグマだまりから噴出するように、高まった欲望が激流となっ

て青年の背筋を駆け上る。ペニスの奥から脳髄までを直結した快楽神経を肉欲と悦楽がショートさせ、頭の中で火花が散った。

「ああっ、くうっ、ん、んあっ、あっあああ――っ」

少女の高く細い叫びと同時にペニスが激しく収縮した。凝縮された快感が脈動とともに白濁する液体となって細い身体の奥を突き上げ、打ち抜こうとしていた。

「あ、熱いの、熱いのが出てるっ。お兄ちゃんのがあっ」

ほとばしる熱い液体が膣奥の粘膜を叩き、子宮までも届けとぶちまけられる。脈動するペニスから驚くほどの圧力で噴出するスペルマが女体の奥に、たった今まで処女だった妹の身体に吸い込まれていく。

「ビクビク、してるっ。いっぱい来てるっ」

両親の最大の宝、自らも愛し育んできた妹への射精。背後を真っ黒に塗りつぶされるような背徳感に満ちていた。ドロドロした禁忌を犯す快感が愉悦をさらに増幅する。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

兄にしがみついたまま、新鮮な空気を貪ろうとする更紗の顔は真っ赤だった。閉じられたままの目がようやく開いた時には、射精の快感がせつなくも甘い脱力感に変わっていた。

「お兄ちゃんと、しちゃったんだ……あたし……」
全身が痺れるような快感と、虚脱感。高まったエネルギーが一気に放出されたあとの脱力感が肉悦と入り交じっていく。更紗の喘ぎが、身悶えが腕の中でなおも暖かく、汗ばんだ肌が柔らかく、あまりにもすべやかだった。
「一度きりだと言ったぞ、更紗」
「わかってる。わかってるけど……」
幸せそうな表情を浮かべる妹を引き離すこともできず、しばし青年はほっそりとした溶けるように柔らかい肢体を身体を腕の中に感じていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!